神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

イスパニア語の感情を表す語句に導かれる接続法について

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2007-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 福嶌, 教隆, Fukushima, Noritaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/595

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

イスパニア語の感情を表す語句に導かれる接続法について

福　嶌　教　隆

1. はじめに

イスパニア語の叙法対立は，一般に，「事実をありのままに述べる」（直説法）か，「頭の中に思い描いている内容を表す」（接続法）かの違いとして説明されることが多い。[(1)] だが，これでは捉えきれない事例もある。中でも alegrarse, estar contento, sorprender, lamentar, ser triste, ser una lástima など，感情を表す語句に導かれる従属節（以下，「感情節」と呼ぶ）では，事実を表す場合にも接続法が用いられ，従来より研究教育者の関心を集めてきた。

(1) —Me alegro de que **estés** aquí porque tengo que pedirte algo—dijo—. Para esta tarde, sin falta, tienes que dejarme otra vez el piso. (I. Grasa, *De Madrid al cielo,* Anagrama, Barcelona, 1994, p.42)

(2) Éste es un mensaje para Luis, que se ha comprado por fin el coche de sus sueños después de dos años trabajando. Lástima que eso le **haya hipotecado** hasta las cejas. (*Diario de Alcalá,* Alcalá de Henares, 17-IV-2003, p.2)

筆者はかつて，この用法を Terrell & Hooper (1974) の提唱する「接続法は non-assertion（非主張）を表す叙法である」という説（以下，Terrell & Hooper 説と呼ぶ）を踏まえ，拙いながら考察を試みた（拙稿 (1978)）。

本稿では，この問題を改めて取り上げ，現時点での管見を述べてみたい。

2. 近年の諸研究

2.1. Terrell & Hooper 説の系譜

Terrell & Hooper 説は発表後四半世紀を経て，スペインの Real Academia Española にも受け入れられた。即ち Academia の Ignacio Bosque と Violeta Demonte が編集した記述文法（Bosque & Demonte, dirs.（1999））の第49章（Ridruejo 執筆），第50章（Pérez Saldanya 執筆）では，基本的には「直説法は aserción（主張）を表し，接続法は no aserción（非主張）を表す」という見地に立って，叙法の記述が行われているのである。[(2)]

この説に基づくと，感情節に接続法が用いられるのは，その内容が事実であることを主張するのではなく，その内容を踏まえ，時にその内容が事実であるとの前提に立って，主節の内容を伝えようとするからだと説明される。

Terrell & Hooper 説を単に継承するだけでなく，その問題点を指摘し批判することから発展した論考も多く見られる。例えば Hummel（2004）は，同説は叙法そのものよりも，その周辺の他要素に拘泥していると批判した上で，「直説法はできごとの現実的展開の様相に焦点を当てる（focalización de ciertos aspectos del desarrollo real de un evento）叙法であり，接続法はできごとの生起する時点の様相に焦点を当てる（focalización de la incidencia del evento）叙法である」との仮説を提唱する。[(3)]

また宮下（2005）は，評価を表す語句に導かれる名詞節の叙法についての詳細な分析を行ったのち，「Terrell & Hooper 説が未だに部分的に有効な理論であることが確認されたが，直説法を主張という意味概念で説明しているものの，接続法に対しては積極的な定義づけがなされていないことが分かった」（p.229）と結論している。

さらに和佐（2005）は，「（Terrell & Hooper 説では）〈主張〉を表すはずの直説法が疑問文や感嘆文などで使用されることが説明できなかった。直

説法を無標の法と捉え，話し手の発話時における心的態度としてのモダリティの観点から文を分析することで，さまざまな文を包括的に捉えることができるようになる。」(p.190) との視点から、感情節を次のようにみなす。「感情を表す文は，聞き手への伝達を目的とした文である。情報構造の中で従属節における接続法は，補文命題を背景化するため，命題に対する真偽判断を差し控えるモダリティを有するとき使用される。一方，直説法は，話し手が真であると伝達する必要があると判断したとき使用される。」(p.168)

実例調査の分野では，De Mello (1996) が，スペイン語圏12都市の口語資料に見られる35種の「個人的反応表現 (expresión de reacción personal)」(admirar, lógico, quejarse など) の導く叙法を調べ，① 従属節の「情報的価値 (valor informativo)」が高い場合は直説法が用いられ，そうでない場合は接続法が用いられる，② 当該の従属節に直説法が現れる率は，スペインよりもイスパノアメリカの方が高い，などの観察を行っている。また高垣 (2007) は約180人を対象とするアンケートの結果，「スペインでは「感情・評価の名詞節中」に用いられる叙法は地域にかかわらず接続法になる均質的な傾向が確認された」(p.74) と結論している。

このように，Terrell & Hooper 説は，おおむね「情報の重要度が低い場合に接続法が用いられる」という見地へと発展し，教育面にも取り入れられるようになった。Borrego *et al.* (2000: 74) や Díaz *et al.* (2002 : 46) は，接続法が既知情報を表すことを，学習者にむけて明瞭に述べている。[(4)]

2.2. その他の見解

一方では，従来からの「接続法は主観的な内容を表す」という説も継承されている。Veiga (2006) は，直説法を「客観的 (objetivo)」，接続法を「主観的 (subjetivo)」という概念と対応させて動詞の形態の分類を行っている。[(5)] 教育面でも，感情節の用法は「主観性」と関連づけて説くことが多い。Ana se alegra de que tengas un buen trabajo. という例文についての，

次の吉川（2007）の説明がその例である。「主節に感情の動詞が用いられると，従属節の動詞は接続法になります。例文では，Bが良い仕事を「持っている（tener)」ことは事実ですが，Aはそれを客観的に捉えているのではなく，「嬉しい」と主観的・感情的に述べているので従属動詞は接続法になります。「非現実」の内容を接続法で表すという原則からはずれる用法です。」(p.28)

また，そもそも接続法の機能を「非現実」,「情報価値の低さ」や「主観性」といった単一の概念で規定することに疑義を呈する見地も存在する。出口（1997）は次のように述べている。「「叙法」が何らかの論理的基準や整然とした意味分類と対応していることを期待するのは学習者だけでなく，多くの分析者にも共通のものだった。直説法／接続法の法対立の全分布を1つの統一基準によって説明しようとする提案はいくつもなされている。(……) 叙法の決定が，ある種の意味素性や論理概念の演算によって統一的に処理されるという一元論の魅力は大きいけれども，形態・統語・意味の各モデュールを突き抜く根源的な法の対立はこの種の図式的な捉え方でうまく説明しきれない面が少なくない。(……)「叙法」カテゴリーに属すと思われる現象が(……) 2項概念に基づくものとは思われない。」(p.111) そして次のように結論する。「叙法対立は，なんらかの単一基準の適用によってではなく，いくつかの文法形式や語彙と絡み合った複数個の「意味単位」の走査によってなされる可能性があるように思われる。」(p.116)

2.3. 本稿の仮説

叙法を論ずるに当たり,「情報価値」に着目する立場,「客観・主観」を重視する立場，多元論を是とする立場があることを見た。本稿では，以下の理由により，第1の見地に属する仮説を採り，その妥当性を探りたい。

接続法が主観的な内容を表すという第2の見地は，感情節に限れば学習者には理解しやすく効果的であるかもしれない。しかし，el hecho de que,

aunque, de ahí queなど，接続法が事実を表すその他の用法には適用できない場合が多い点が，この観点の大きな問題である。

また，叙法選択に作用する諸要素が単一の原則に収束するか，しないかはともかくとして，少なくとも諸要素の中に情報の重要度という要素が存在する，という提案自体は，価値がないとは言えないと考える。

筆者は従来より，接続法の最も基本的な働きは「ある事柄が事実であるか否かについて話者が判断を下さず，中止していること」を表すことであり，そこから派生した働きの1つに「副次的情報の伝達」があるとの仮説をたてて，いくつかの用法の説明に用いてきた。[(6)] 感情節に対しても，この作業を行ってみよう。

3. 実例の分析1：映画シナリオ

3.1. データ

仮説を実例を適用するに当たり，既述の De Mello（1996）などが用いた資料とは重複せず，しかもスペインの現代の一般市民が用いる口語を反映した素材として，最近スペインで制作された映画のシナリオ4本を資料に選んだ。ト書き部分などは除き，会話部分のみを対象とした。

(3) a. Juanma Bajo Ulloa & Eduardo Bajo Ulloa, *Alas de mariposa,* 1991年作，Ocho y Medio, Madrid, 2005.（テーマ：幼児の暴力性）

b. Iciar Bollain y Alicia Luna, *Te doy mis ojos,* 2003年作， Ocho y Medio, Madrid, 2003（テーマ：家庭内暴力）

c. Alejandro Amenábar y Mateo Gil, *Mar adentro*（邦題：海を飛ぶ夢），2004, Ocho y Medio, Madrid, 2004（テーマ：尊厳死）

d. Pedro Almodóvar, *Volver*（邦題：帰郷），2005年作，Ocho y Medio, Madrid, 2006.（テーマ：女性の主体性）

これらの資料から得られた接続法の用例は，次のとおりである。

(4) 用法別一覧

	独	半名	名	名修	関	副	条	計
(3a)	40	1	19	0	8	25	6	99
(3b)	69	1	66	3	19	26	7	191
(3c)	57	3	73	7	30	36	12	218
(3d)	52	0	49	0	20	31	15	167
計	218	5	207	10	77	118	40	675

(独：独立用法，半名：半名詞節，名：名詞節，名修：名詞修飾節，関：関係節，副：副詞節，条：条件文的用法[7])

(5) 活用形別一覧

	現	現完	ra	se	ra複	se複	計
(3a)	90	2	2	3	2	0	99
(3b)	175	3	9	2	2	0	191
(3c)	186	4	24	3	1	0	218
(3d)	128	6	27	2	4	0	167
計	579	15	62	10	9	0	675

(現：現在形，現完：現在完了形，ra：ra単純形，se：se単純形，ra複：ra複合形，se複：se複合形)

このうち，感情を表す語句に導かれる事例は22例（(3b)より13例，(3c)より6例，(3d)より3例）である。また，直説法が同様の環境に現れる事例は2例（(3b)，(3d)より各1例）であった。以下に主要部アルファベット順に，大意を付して掲げる。

(6) 感情節を導く語句[8]

接続法 22	名詞節 18：doloroso 1, echar de menos 4, encantado 1, enrollar（「喜ばせる」の意で）3, extrañar 1, inquietar 1, ir（「喜ばせる」の意で）2, molestar 2, pena 1, preocupar 1, sorprender 1 半名詞節 2：bien 1, pena 1 名詞修飾節 2：pánico 1, tontería 1
直説法 2	名詞節 1：quejarse 1 半名詞節 1：pena 1 名詞修飾節 0

(7) 「感情節 ＝ 名詞節（接続法）」の事例

a. [doloroso] Es muy doloroso que una hija no **quiera** a su madre. (娘が母親を嫌うなんて悲しすぎるわ。) (3d, 128)

b～e. [echar de menos] A－Sí, pero qué echas de menos, ¿que te **lave,** que te **planche** la ropa?

B－No, joder.

A－¿Que te **haga** la comida, que te **caliente** la cama?

(「奥さんがいなくて何を寂しく思いますか？ 洗濯やアイロンしてもらえないこと？」「そんなんじゃない。」「食事を作ってもらえないこと？ベッドのぬくもり？」) (3b, 75)

f. [encantado] ¡Pilar, yo estoy encantada de que te **quedes** en casa, nos vemos tan poco! (ピラール，貴女がここにいてくれるのは歓迎よ。滅多に会う機会がないもの！) (3b, 27)

g. [enrollar] Eso es lo que te enrolla, ¿no? Que te **vean.** (お前はそれが嬉しいんだろう，人に見られるのが。) (3b, 142)

h～i. [enrollar] ¿No es eso lo que haces cuando enseñas tus cuadros? Pasearte por allí, caminar arriba y abajo mientras te siguen, eso es lo que te enrolla, ¿no? que **vean** lo guapa que eres, que te **miren** las piernas y el culo. (人前で絵の説明をしながら，そうしてるんだろう。あちこち行ったり来たりして連中を案内しながら。それが嬉しいんだろう？連中がお前の美貌に見とれて，見つめるのが。) (3b, 142)

j. [extrañar] No me extraña que te **haya dado** miedo. (なるほど，お前が私を見てこわがったのも無理はないわね。) (3d, 78)

k. [inquietar] ¿Y eso es lo que tanto te inquieta? ¿Que me **salga** con la mía? (それがそんなに気になるかい？ 俺があの計画を実行しようとしていることが？) (3c, 147)

l～m. [ir] ¿O es que lo que te va es que te **miren**, que te **miren** el culo mientras hablas? (それとも絵の解説をしている間にみんなに見られるのが嬉しいのか？) (3b, 143)

n～o. [molestar] Pero qué es lo que te molesta, ¿que se **arregle**, que **hable** de pinturas? (でも，あなたは何が嫌なのですか？ 奥さんが化粧すること？美術館で人前で絵画の説明をすること？) (3b, 125)

p. [pena] Es una pena que no te **haya gustado** también el dueño. (君もオーナーがお気に召さなかったとは残念だ。) (3d, 54)

q. [preocupar] Me preocupa mucho que te **puedan** involucrar algún día. (いつか君まで巻き込んでしまわないかと心配でたまらない。) (3c, 156)

r. [sorprender] ¡No deja de sorprenderme que **muestre** usted tanta sensibilidad ante mi vida... teniendo en cuenta que la institución que usted representa acepta a día de hoy nada menos que la pena de muerte y la guerra, y durante siglos condenó a la hoguera a los que no pensaban *correctamente!* (あなたが私の命についてそれほど細やかな心遣いをして下さるのは驚きです。あなたの機関（カトリック教会）は今なお死刑制度や戦争を是とし，何百年にもわたって「正しい考え」を持たぬ者を火刑に処してきたではありませんか。) (3c, 132)

(8) 「感情節 ＝ 半名詞節（接続法)」の事例

a. [bien] Qué bien que **hayas podido** venir, era una lástima dejarle solo en un día como hoy... (お前が来ることができて良かった。こんな日に父さんを一人ぼっちにしておくなんて悲しいもの。) (3b, 27)

b. [pena] Qué pena que no se **vea** el mar desde aquí. (ここから海

が見えないのが残念ね。）（3c, 52）

（9）「感情節 ＝ 名詞修飾節（接続法）」の事例

a. [pánico] Y Ramón tiene pánico de que todo esto se **enfoque** mal desde el principio...（それでラモンはこの問題が根本的に誤解されてるんじゃないかとやきもきしてるの。）（3c, 17）

b. [tontería] Y un día ya me soltó no sé qué tontería de que nos **casáramos,** y le dije: mira, chica, lo mejor es que te vayas, que rehagas tu vida como puedas y que me olvides...（で，ある日，彼女は俺に結婚しようだなんて馬鹿げた話を切り出した。そこで俺は言ってやった。「いいか，君はここを出た方がいい。俺のことは忘れて君の人生をやり直すんだ。」）（3c, 59）

（10）「感情節 ＝ 名詞節（直説法）」の事例

[quejarse] ¡La de veces que la he oído quejarse de que ***pasabas*** de ella como de la mierda!（あんたが疎遠だと母が嘆くのを，私は何度聞いたか！）（3d, 141）

（11）「感情節＝半名詞節（直説法）」の事例

[pena] Qué pena que no ***está*** aquí.（お義父さんがここにいなくて残念だ。）（イギリス人の発話）（3b, 71）

3.2. 考察１：事実を表すか否か

接続法の半名詞節・名詞節・名詞修飾節の用例222の大半は希求や疑惑を表す語句に導かれるものが占めており，感情節の用例は約１割に当たる22に過ぎない。しかし直説法をとる感情節は２例だけであり，かつその１つ(10)が quejarse を主動詞とするものであり，もう１つの(11) がスペイン語を母語としない登場人物の発話であることが考慮されなければならない。[(9)] 従って，今回用いた資料では，感情節では規範に極めて忠実に接続法が用いられていると言える。これは先述の De Mello（1996）や高垣（2007）の観察と合致

するものである。

この資料では，感情節が想定・可能性を表す事例と並んで，事実を表すもの，その中間に位置するものが観察される。

(7)～(9) の事例のうち，従属節が個別的出来事としての事実を表すのは，(7j, p, q, r), (8a, b) の6例である。このうち(7q) は事実ではなく危惧を表しているようだが，それは従属動詞 poder の働きによるものであって，従属節全体では「恐れが現実になる可能性がある」という事実を伝えている。

(7a) は個別的事実を指しつつ，一般的に「もしそういうことが起これば，痛ましいことだ」という表現形式をとっている。(7f) では，「ピラールの滞在」は発話時点では事実だが，今後も継続するかどうかは定まっていない。(7k) の「計画の実行」は進行中だが達成には至っていない。この3例は，事実を表す例とそうでない例の中間に位置するものと言える。そして(7b～e, g, h～i, l～m, n～o), (9a) の従属節，計12例は，事実というよりも想定・可能性を表している。

なお，(9b) では，統語的には tontería を主要部とする従属節に接続法が現れているが，意味的には me dijo que nos casáramos, lo cual es una tontería と換言できるような，提案の表現に用いられる接続法の事例であり，いわゆる希求用法に属するものであるから，他とは区別する必要がある。

3.3. 考察2：仮説の適用

では，これらの用例に第2.3節に掲げた仮説を適用すると，どうなるだろうか。まず，想定・可能性を表す(7b～e, g, h～i, l～m, n～o), (9a) および希求を表す (9b) の従属節は，「その事柄が事実であるか否かについて話者が判断を下さず，中止している」事例であるから，接続法で表すにふさわしい。また，想定・可能性を示す例と事実を表す例との接点に位置する (7a, f, k) の従属節も，判断が完全に下されていないのであるから，接続法が用いられる環境だと言える。

一方，従属節が事実を表す（7j, p, q, r），（8a, b）は，先の原則から派生した「副次的情報を表す」例として説明できる。（7j）は，聞き手が話者を見てこわがったという，両者にとって了解済みの事実を情報として伝える文ではない。その事実を踏まえて，「それも無理はない」という話者の気持ちを伝えるのがねらいである。同じく（7p）は話者の無念さを，（7q）は話者の懸念を主たる情報として表明しようとする文であり，従属節はそれを成立させるための副次的情報を提供している。（7r）では，聞き手の主張を話者がどれほど意外に思っているかが表されている。ここが主眼であることは，「なぜ意外に思ったか」が後続部分で詳しく説明されていることからもうかがえる。

半名詞節の用例（8a）でも同様に，後続部分に理由が述べられている。これは「お前が来た」ことの説明ではなく，「私は良かったと思っている」ことの説明であり，これが主たる情報であることが分かる。（8b）の話者は「残念に思っている」ことを伝えようとしている。その部屋で暮らす聞き手に「この部屋からは海が見えない」ことを殊更に教えようとするものではない。このように，これらの事例は全て仮説によって無理なく説明できる。

しかし視点を変えると，事例の中には仮説と相容れないものがあるようにも思えてくる。それは（7b～e, g, h～i, k, l～m, n～o）である。これらは「何を寂しく思うか？ それは～だ」，「嬉しいのは～だ」，「気になるのは～ということだ」，「何が嫌なのか？ それは～だ」のような形をしている。このように部分疑問文で問われている内容や擬似分裂文の叙述補語の内容は，一般に情報の焦点に当たる。従って，副次的情報を表すはずの接続法がそこに現れるのは説明がつかないということになる。

だが，これらの事例は仮説の反例には当たらない。これらは先述のとおり，事実を表すものではなく，想定や可能性を表すものである。だから，接続法の基本的機能である「判断の中止」の次元で捉えられるべき事例であって，「副次的情報の表明」という派生的機能とは大きく関わるものではない。こ

のような場合は，接続法が情報の焦点部分に現れることもありうる。仮説は，接続法が常に副次的情報を担うと主張しているわけではない。

事例(7b～e, n～o) は，心理療養士と患者とのやりとり中の文であるが，同じ状況で，次のような表現も使われている。即ち，主要部が感覚動詞 sentir のような直説法指向の語句でさえあれば，当然ながら，焦点に直説法が立つことが確認できる。

(12) A－¿Qué es lo que sentimos?

B—Que te ***acaloras***, que te ***sulfuras.***

(「今，何を感じますか？」「怒っている。かんかんだ」) (3b, 61)

先の批判に対しては以上のように反論できるが，この問題は次の疑問を生む。つまり，本稿の資料には事実を表す感情節が情報の焦点となり，かつそこに接続法が用いられている例はなかったが，そういう例は実在しないのだろうか，ということである。事実を表す感情節の内容を情報の焦点にした場合，叙法選択はどのようになるのだろうか。

4. 実例の分析 2 ：電子コーパス

4.1. データ

感情節が情報の焦点になった例には，次のようなものがある。ただし，(13) は現代語ではないので，あくまで参考例である。

(13) —¿Sabes de qué estoy maravillado, Sancho? De que me ***parece*** que fuiste y veniste [*sic*] por los aires, pues poco más de tres días has tardado en ir y venir desde aquí al Toboso, habiendo de aquí allá más de treinta leguas; (...). (M. de Cervantes, *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha,* parte I, capítulo 31, 1605; 1940, *Obras completas* II, Aguilar, Madrid, p.454)

(「ところでサンチョよ，わしが今いかなることに驚嘆しているか，お前に分かるかな？それはな，お前が空を飛んでいき，空を飛んで帰っ

てきたとしか思えぬことよ。というのも，ここからエル・トボーソまでは30レグア以上もあるというのに，お前がそれを往復するのにほんの3日ほどしかかからなかったからじゃ。」）（牛島信明・訳『ドン・キホーテ』前篇２，2001，岩波書店，p.275）

(14) —Cuántas veces ¿sabes qué me molesta? que muchas veces la ***he recogido*** ahí en la avenida y ***llegamos*** juntas, ¿y cómo cuando llegamos juntas si no me ***pone*** la nota, porque yo la he llevado, porque yo la he recogido en la avenida? (Venezuela, Cara a Cara 局放送談話，発話年記載なし，CREA)（「私が何に何度も腹をたてるか分かる？ これまで何度も私が車で出勤の途中に大通りで彼女を乗せて，２人で一緒に職場に着いたのに，私だけ出勤簿につけてもらえなかったのよ。私が彼女を連れていったのに。」）

(13) の主要部は maravillado, (14) の主要部は molestar という，感情を表す語であり，かつ従属節の内容は話者にとって事実である。estoy maravillado de que, me molesta que という無標の形式（以下，「基本構文」と呼ぶ）ならば接続法をとることが予想されるが，ここでは基本構文の主節が疑問文になっており，それに対して発話者自身が答える，という形式がとられ，直説法が用いられている。

このような事例が現代語で豊富に得られれば，基本構文をとる感情節よりも，その内容を焦点化した場合のほうが直説法が好まれることになり，先の仮説を支持する根拠の１つとなる。

「lo＋形容詞＋es que」型の文については，これを裏付ける De Mello (1999) の調査報告があり，拙稿 (1992) でも統語分析を行った。

今回は，この型の文以外の形式にも目をむけ，新たな事例を広範囲に集めて検証してみたい。そこで，Real Academia Española の電子コーパス CREA (Corpus de Referencia del Español Actual) を利用して，いくつかの感情節の事例を観察してみた。調査は2007年夏，「全スペイン語圏，全

分野」という条件で，基本構文と，擬似分裂文（lo que＋動詞＋es que），「lo＋形容詞＋es que」型の文，「主語名詞＋es que」の語順になった文を対象とした。次の表がその結果である。基本構文と焦点化した形式のいずれも十分な個数が得られたものを上位に，個数が不十分なものを下位に記した。また，参考として，価値判断の形容詞 malo に関する結果を付した。[10]

（15） CREA から得られた事例の個数

検索語句（主節＋que）	直説法	接続法	計	検索語句（主節＋que）	直説法	接続法	計
a. es lamentable que	1	48	49	g. me preocupa que	1	23	24
a'. lo lamentable es que	6	0	6	g'. lo que me preocupa es que	1	5	6
b. es triste que	0	11	11	h. me sorprende que	5	57	62
b'. lo triste es que	13	1	14	h'. lo que me sorprende es que	1	0	1
c. es preocupante que	1	18	19	i. me molesta que	1	31	32
c'. lo preocupante es que	9	2	11	i'. lo que me molesta es que	1	0	1
d. es sorprendente que	1	62	63	j. me alegro de que	2	55	57
d'. lo sorprendente es que	11	11	22	j'. lo que me alegro es de que	0	1	1
e. es raro que	1	283	284	k. me entristece que	0	3	3
e'. lo raro es que	5	6	11	k'. lo que me entristece es que	1	0	1
f. es una pena que	2	44	46	l. (*参考) es malo que	0	31	31
f'. la pena es que	3	5	8	l'. lo malo es que	133	8	141

4.2. 考察

表(15) のうち，(15g～k) は比較対象の一方または両者の個数が不十分である。量的に有意義なデータと言えるのは(15a～g)，計 7 件である。そのうち，(15a～c) [lamantable, triste, preocupante] では，基本構文では接続法が好まれるのに，従属節を焦点化した文では直説法が優位になり，叙法選択が逆転している。(15d～f) [sorprendente, raro, pena] では，従属節を焦点化すると接続法とほぼ拮抗するまでに直説法の使用度が上昇する。(15g) [preocupar] では，焦点化した節内でも接続法の事例のほうが多い。

(16) a. [(15b) es triste que] Puede que no haya ninguna ley que obligue a los Ayuntamientos a dar subvenciones, pero en nuestro pueblo las asociaciones (y en concreto Peñablanca)

realizan más del 95% de las actividades culturales que hay en el municipio, y es triste que el concejal de Participación Ciudadana, de cuya Concejalía han alardeado tanto, presumiendo de ser pionera en la provincia, que debería colaborar estrechamente con las asociaciones, nunca nos **haya convocado** como concejal del área con propuestas de actividades a realizar, y se **permita** el lujo de tirar por tierra nuestra labor. (*El Norte de Castilla,* 18-XI-2002, Valladolid. 日刊紙)(要旨：役所が私たちに声をかけてくれないのは悲しいことだ。)

b. [(15b') lo triste es que] Según indicó este propietario de bar, "este dinero lo pagaríamos bien a gusto si se empleara en la realización de actos que produjeran un beneficio al pueblo, pero lo triste es que lo ***utilizan*** para comprar bebidas, montar un chiringuito en su local y hacer la competencia a nuestros establecimientos". (*Diario de Navarra,* 7-I-2001, Pamplona. 日刊紙)(要旨：悲しいことに，役所は私たちの生活を脅かしている。)

この2例は，地方行政に対する不満を述べている点で内容が似ており，しかも発話者が事実だと判断したことを述べているが，一方は接続法で，他方は直説法になっている。(16b) のように，何が不満なのかに焦点を当てて述べる文で直説法が選ばれている点に注目すべきである。

(17) a. [(15g') lo que me preocupa es que] A mí lo que me preocupa es que no se ***ha abierto*** un proceso de negociación; aquí lo que ha ocurrido es la presentación por parte de Iberia de un plan de viabilidad a muy corto plazo, para 'pasar la arruga'. (*El Universal,* 21-I-1997, Caracas, 日刊紙)(要旨：まだ交渉の段取

りに入っていないことが気がかりだ。)

b. [(15g') lo que me preocupa es que] A mí, lo que me preocupa es que la gente **empiece** a pensar que lo que es injusta es la lotería. (*ABC Electrónico,* 15-XI-1997, Madrid. 日刊紙電子版)(人々が宝くじの公正な実施を疑い始めるのではないかと気がかりだ。)

(17a, b) はともに従属節を情報の焦点とする形式だが，一方には直説法，他方には接続法が現れている。(17a) は既に生じている出来事について述べるのに対して，(17b) では今後起きるかもしれない事態への危惧を表している。従って，(17b) に接続法が選ばれる理由は，第3．3節で事例 (7b～e, g, h～i, k, l～m, n～o) について述べたのと同じ原理で説明できる。

このように，集計(15)や用例(16)，(17)を考慮すると，次のような傾向が認められる。即ち，lamentable や triste のように，生起した出来事について述べることが多い述語では，従属節を焦点化した時に直説法が用いられ，preocupar のように，これから生起しそうなことへの懸念を表すことのできる述語では，同様の環境においても接続法が維持される場合が多い。

だから，対象を事実を述べる事例に限定すれば，感情節が情報の焦点となる場合は直説法が選択される可能性が非常に高いと言える。そして，この調査は，本稿で提出した仮説を支持する結果となった。

5. 結　び

以上の考察をまとめた次の (18) をもって，本稿の結論とする。

(18) a. 一般に，イスパニア語の感情を表す語句に導かれる節（感情節）には，接続法が用いられる。その内容が仮定的である場合は，「ある事柄が事実であるか否かについて話者が判断を下さず，中止していることを表す」という，接続法の基本的な働きが関与している。

b. 感情節の内容が発話者にとっての事実を表す場合は，「副次的情報

の伝達」という，接続法の派生的な働きが関与している。

c. 主節またはそれに準じる要素は，接続法を用いた感情節が表す「副次的情報」を踏まえて，「主たる情報」を伝達する。

d. 接続法のこの機能は，el hecho de que, de ahí que, aunqueなどの語句に導かれる用法にも認められる。

e. この仮説を現代スペインの映画シナリオから得られた用例に適用して，特に大きな問題がないことが確認された。

f. また，大規模なコーパス CREA から得られたデータから，「従属節の情報価値を高くすると，接続法よりも直説法が好まれる傾向がある」ことが確認された。これは先の仮説を支持するものである。

感情節は，現代では接続法をとるのが一般的だが，かつてはしばしば直説法が用いられた。[11] 従って，通時的な考察も不可欠だが，本稿では *Don Quijote* からの用例(13)をあげたのみで，立ち入らなかった。また，感情を表す語句と関係の深い bueno, malo, importante, justo, natural のような価値判断を表す語句に導かれる節も，対象外とした。一元論的発想の長所と危険性に配慮しつつ，このような問題を論じるのが，次の課題である。

注

＊本稿は，2007年９月30日に神戸市内で開催された対照研究セミナー例会で行った口頭発表に基づくものです。席上，貴重なご意見を下さった参加者諸氏に厚く御礼申し上げます。

(1) たとえば Real Academia Española (1973 : 454) は，直説法と接続法を「現実／非現実 (realidad / no realidad)」の対立を示す形式と捉えている。またAlarcos (1994 : 154)は，前者を「非架空 (no ficción)」を表す叙法，後者を「架空・非現実的性質 (carácter ficticio, no real)」を持つ叙法と規定している。教育においても，直説法は「事象や行為を現実・事実として述べます」，接続法は「事象や行為を非現実・仮定として述べます」(吉川，2007 : 6) といった説明が一般に行われている。

(2) 拙稿 (2001) を参照。

(3) 拙稿 (2006) を参照。

(4) なお，ヨーロッパ諸語の統一習得基準の一環として Instituto Cervantes (2006) が定める６段階の基準（A1～C2）では，接続法は下から３番目のレベルB1から登場する。感情節の用法は，接続法現在を用いる表現がB1に，接続法過去を用いるものがその１つ上位のB2に位置づ

けられている（Vol.2, pp.81, 195～197）。

(5) Veiga（2006）は，直説法を3種に分け，第1種（現在形など）は「objetivo + no irreal + no incierto」，第2種（未来形など）は「objetivo + no irreal + incierto」，第3種（過去未来形など）は「objetivo + irreal」という素性を持つとする。また接続法を2種に分け，第1種（現在形など）は「subjetivo + no irreal」，第2種（過去形など）は「subjetivo + irreal」という素性を持つと説く（p.120）。即ち，直説法と接続法の最も大きな違いは「objetivo / subjetivo」である，という立場である。副詞節の叙法を扱った Veiga *et al.*（2006）でも，同じ観点から論が進められている。

(6) 例えば拙稿（2004 : 129）を参照。

(7) 「半名詞節」とは，¡Qué alegría que ～!, ¡Lástima que ～! のように，「定型動詞を欠く主要部 + 接続詞 que」に導かれる従属節をさす。「名詞修飾節」とは，la causa de que, el hecho de que のように，接続詞 que などに導かれて先行名詞を修飾する従属節をさす。「条件文的用法」とは，条件節，帰結節，como si に導かれる節などをさす。この用法は時制の面で他とは異なる様相を示すので，独立させた。

(8) 原則として bueno, malo, bien, mal は価値判断を表す語とみなし，感情節を導く語句には含めない。今回用いた資料中，これに関係する事例は（8a）[bien] のみである。この事例は喜びという話者の感情を表すものと判断して，対象から除外しなかった。

(9) quejarse が直説法を従える傾向にあることは従来より指摘されている。Butt *el al.*（2004 : 260）を参照。先述の De Mello（1996）の調査では，この動詞が直説法を従える例が15，接続法を従える例は皆無だったという。また筆者が Real Academia Española の電子コーパス CREA で「全スペイン語圏，全分野」の条件で2007年夏に調べたところ，se queja de que が直説法を導く例は85，接続法を導く例は17であった。また(11) の文法性について1人のスペイン人に尋ねたところ，次のような興味深い回答が得られた。「明らかに文法的ではない。だが，私もこのような表現をすることがある。使用しながら，いつも気がとがめる。それは，自分の感情を述べるつもりで発話を開始したのに，途中から『このような事実がある』ということを伝える方向にすり替えてしまうからである。」実例は両叙法とも観察されるが，直説法の使用はラテンアメリカの方が多いようである。次例を参照。

(i) (...), y qué lástima que yo no me ***puedo*** hacer el plato viéndote, (...) (M. Puig, *El beso de la mujer araña,* Seix Barral, Bercelona, 1976, p.139. アルゼンチンの作家)

(ii) Lástima que no **asome** por alguna parte la cabecita del líder de AP, (...). (*Cambio 16,* Núm. 705, 3-VI-1985, Madrid, p. 14. スペインの週刊誌)

(10) CREA が提供するデータの中には対象外の事例も含まれているが，それらは全て除外した。例："me sorprende que" で検索した場合の次の事例：(...) me infunde un sentimiento de humildad que a mí mismo me sorprende, que no me explico: (...) (E. Mendoza, *La ciudad de los prodigios*) また，注8に述べた理由により bueno, malo は今回の考察対象外であるが，「lo malo es que ～」という表現は使用頻度が高く，その叙法選択が話題にされることも多いので，参考までにその数値を記した。なお，lo bueno es que も直説法36例，接続法2例と，直説法が優勢である。Butt *et al.*（2004: 260～261）を参照。

(11) Jensen *et al.*（1973: 54～57）などを参照。

引用文献

Alarcos, Emilio (1994) *Gramática de la lengua española*, Espasa Calpe, Madrid.

Borrego Nieto, Julio, J. J. Gómez Asencio & E. Prieto de los Mozos (2000) *Aspectos de sintaxis del español,* Santillana, Madrid.

Bosque, Ignacio & V. Demonte (dirs.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*, Espasa Calpe, Madrid.

Butt, John & C. Benjamin (1988[1], 2004[4]) *A New Reference Grammar of Modern Spanish,* McGraw-Hill, New York.

出口厚実 (1997) 『スペイン語学入門』, 大学書林。

De Mello, George (1996) "Indicativo por subjuntivo en cláusula regida por expresión de reacción personal", *Nueva Revista de Filología Hispánica* 45:2, El Colegio de México, México, D.F., pp.365-386.

_____ (1999) "*Lo*+adjetivo+*es que* seguido de indicativo / subjuntivo: *Lo importante es que tienes / tengas amigos", Hispanic Review* 67: 4, University of Pennsylvania, Philadelphia, pp. 493～507.

Díaz, Pilar & M. L. Rodríguez (2002) *El subjuntivo 1. Nivel intermedio,* Edinumen, Madrid.

Hummel, Martin (2004) *El valor básico del subjuntivo español y románico,* Universidad de Extremadura, Cáceres.

Instituto Cervantes (2006) *Plan curricular del Instituto Cervantes. Niveles de referencia para el español,* Biblioteca Nueva, Madrid.

Jensen, Frede & T. Lathrop (1973) *The Syntax of the Old Spanish Subjunctive,* Mouton, The Hague.

宮下和大 (2005)「スペイン語の名詞節における法の選択について —いわゆる評価節をめぐって—」, 東京外国語大学修士論文。

Pérez Saldanya, Manuel (1999) "Capítulo 50. El modo en las subordinadas relativas y adverbiales", en Bosque *et al.* (dirs.) (1999), pp.3253～3322.

Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española,* Espasa-Calpe, Madrid.

Ridruejo, Emilio (1999) "Capítulo 49. Modo y modalidad. El modo en las subordinadas sustantivas", en Bosque *et al.* (dirs.) (1999), pp. 3209～3252.

高垣敏博 (2007)「スペイン語統語現象の地理的バリエーションについて—スペインでの調査から—」,『スペイン語学研究』22, 東京スペイン語学研究会, pp. 69～86。

Terrell, Tracy & J. Hooper (1974) " A semantically based analysis of mood in Spanish", *Hispania* 57, AATSP, Baltimore, pp. 484-494.

Veiga, Alexandre (2006) "Las formas verbales subjuntivas. Su reorganización modo-temporal", Concepción Company Company (dir.) *Sintaxis histórica de la lengua española,* Fondo de Cultura Económica, México, D.F., Vol.1, pp. 95-242.

_____ & M. Mosteiro Louzao (2006) *El modo verbal en cláusulas condicionales, causales, consecutivas, concesivas, finales y adverbiales de lugar, tiempo y modo,* Universidad de Salamanca, Salamanca.

和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ』, くろしお出版。

吉川恵美子 (2007) 『接続法を使って話そうスペイン語』, 日本放送出版協会。

拙稿 (1978)「イスパニア語接続法の感情動詞に導かれる用法について」, 『外国語教育』 5, 天理大学, pp.25～37。

_____ (1992)「「Lo+形容詞+es que」構文における叙法選択について」, 『神戸外大論叢』 43: 7, 神戸市外国語大学, pp. 51～65。

_____ (2001)「「スペイン語記述文法」における叙法の取り扱いについて」, 『ロマンス語研究』 34, 日本ロマンス語学会, pp.67～76。

_____ (2004)「aunque節中の叙法について (2)」, 『神戸外大論叢』 55: 6, 神戸市外国語大学, pp.111～131。

_____ (2006)「書評 Martin Hummel, *El valor básico del subjuntivo español y románico*」, 『イスパニカ』 50, 日本イスパニヤ学会, pp.189～193。

http://www.rae.es/(Real Academia Española の CREA のサイト)